

---

# 大切なものは

蒼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切なものは

### 【Nコード】

N7942V

### 【作者名】

蒼

### 【あらすじ】

忘れられると思ったのに……。彼からの迎えはやっと平穩になった私の日常を奪っていった。消された巫女であった私の話。異世界トリップです。ハッピーエンドにする予定。

## 01 過去からの迎え

「お探しいたしました。」  
その姿を見た瞬間、時が流れた始めたのかもしれない……。

久しぶりに見るその姿は3年前と変わらない。いや、もっと精悍さを増した

かもしれない等と場違いなことを考えてしまった。

ただ何もせず、見ているだけの私に対して、彼の後ろに控える男は苛立ちを

隠そうとはしない。

まあ、そうだろう。將軍の彼がずっと頭をたれているのに対して、

平凡な女は

ただ見ているだけ。なんて礼儀しらずだとかおもっているんだろう。はあとため息を一つついて、

「どなたかとお間違えではございませんか？私は將軍であらせられるカイル様に

跪いて頂くような者ではございません。

もしかして、私の前にこの部屋に住んでいた方ではないでしょうか。

それでしたら私では 解りかねます。

大変申し訳ございませんが、大家にでもご確認をお願いいたします。」

これで大丈夫かな、と考えながら扉を閉めようとした。  
その時だ、

「なんて無礼な女だ！！將軍閣下であらせられるカイル・ラル・ウ

オーラル様に

向かって！！ 不敬罪で牢屋にぶちこんでやる！！」

彼の後ろに控えていた男、彼の配下だろう人が扉の問答用で開け、私の手を伸ばして来た。

イラッとして逆らってやろうかと思っただが、ここで余計な争いを起こしても

面倒なだけだと諦め、「申し訳ございません！」と怯えたふりをして謝ろうとしたところ、

「止める！この方への無礼は許さんぞ！！」

と怒りをこめた声が聞こえ、彼の配下も私もピタッと動きを止めた。

彼の配下を上司の怒りを買ったことに気づき、即座に

「申し訳ございません！！」と彼に向かって謝罪をした。

「私に謝罪をしてもしょうがないだろう」

と彼は配下に叱咤し、次に私に向かって、

「部下が失礼いたしました。私はあなた様をお連れするよう

申し付かっております。ご同行願えますでしょうか？」

と言った。

これって謝罪か？しかも「ご同行願えますでしょうか？」って

問いかけているけど、強制でしょ、明らかに。

ズキズキと痛み出した頭に手を当てて、どう回避するかを考えようと視線を上げると、絶対引かないという彼の視線をあい、

「・・・承知いたしました」

と返答するしかなかった。

## 01 過去からの迎え（後書き）

初めての投稿になります。

どこに行くのか作者自身まだわかりませんが、頑張ります。

## 02 旅立ち前夜

彼の迎えを了承した後、すぐにでもと行動を起こそうとした彼に1日だけ時間が欲しい旨を伝え、渋々ではあるが、了承してもらった。・・・彼の配下には睨まれてしまったが。

彼らが去った後、ため息をついて家の整理を始める。

すぐ解放されればよいが、長期間にわたって拘束される場合もある。もしくは殺されるか。

そんなことを考えながら整理をし、旅の支度をする。

物はないしてない為、すぐに終わる。

一年半暮らした部屋を見回した後、部屋を出る。

夕方近くで人が多くなっていたこと、將軍を拝命しているお偉い方が来たこと、そして彼の配下が怒鳴ったためだろう。少なくとも人がこちらを伺っていた。

またもやため息がでる。話しかけるなオーラを発しながら、人ごみを抜ける。

行き先は大家さんの家だ。

私の部屋がある建物より2軒先に大家であるアリア様の家がある。

玄関でノックをすると年配の男性が顔を出した。アリア様のお世話役、アーライ様だ。

アーライ様は私の顔を見て苦笑し、応接間へ通してくれた。

少し待っていると、車椅子に座った年配の女性が姿を現した。

私の家主であり、恩人でもあるアリア様だ。アリア様もアーライ様と同じように私の顔を見て苦笑した後、椅子を勧めた。

「で、いつ行くの？」

挨拶する間もなく、決定事項のように言われ、さらに膨れっ面になった私だが、はあっとため息をついた後、明日出立すること、部屋にあるものは好きなように処分して欲しい旨を伝えた。

「あら、帰ってこれないのかしら」

「分かりません。あれから3年も経っています。いまさら私をどうするつもりなのか検討もつかないので」

「それでいいの？まあ、あなたがそれでいいのなら私はかまわないけど」

「お世話になっておきながら、恩も返せず、大変申し訳ありませんが・・・」

「別に楽しかったからいいわ。あなたにはほんとうに楽しませてもらってたわ」

頭を下げているとくすくす笑い声が聞こえ、いわれた言葉に冷や汗をかいた。

「では、これは私からの餞別よ。受け取ってくれないかしら」

アーライ様より受け取ったものは碧い石、レイルのペンダントだ。レイルは魔石といわれる物で価値の高いものだ。そんな高価なものは受け取れないと断ろうとすると、

「たいした価値はないものよ。でもあなたを守ってくれるわ。私の心配を少しでも減らすと思って受け取ってくれないかしら？」

と首をちよこんと傾げながら言われてしまった。そんなこと言われ  
たら断れないじゃないかー！と心の中で叫びながら、

「……………ありがとうございます。大事にします」

受け取った瞬間、一瞬光ったような気がしたのは気のせいだろうか。  
……？

### 03 旅立ち

アリア様に旅立ちの挨拶をし、働かせてもらっていたパン屋のジーンに挨拶をし、部屋に帰ったのは夜も更けた時間だった。

明日も早いことだし、と早く寝ようとするが、なかなか寝付けず、結局眠ったのは明け方近くだったと思う。

しかし、習慣というものは怖い。パン屋での仕事が早い為、いつもどおりの時間に目が覚めてしまい。たいして眠れなかった思ったが、仕方ないと諦め旅支度をした。

準備をし終わり、さてどうしようかと思ったところで、ノックが響く。

扉を開けるとそこには旅装束の將軍閣下がいた。

「準備はよろしいでしょうか」

「はい。ああ、すいませんがちょっと寄りたいたいところがあるのですが、いいでしょうか。」

この部屋の鍵を大家さんに返したいんです」

「かしこまりました。では、どうぞ」

馬鹿丁寧な対応にため息が出そうになるが、ぐっところえて一緒に建物を出る。

そこには昨日彼と共に部屋に来た配下の他にもう1人いた。

「紹介致します。昨日私と一緒に伺い致しましたアズール・ドレイク。そしてこっちがイグナール・レフォンヌと申します。私とこの2名にてお連れ致します」

「お世話になります。私はレイと申します」

彼、カイルが紹介する。ふーんと思いながら、私も挨拶し、ぺこつと頭を下げると、昨日部屋に来たアズールは不承不承というように、イグナールは人好きのする笑顔を浮かべながら頭を下げた。

それから4人でアリア様の家に行き、アーライ様に鍵を返すとともに、改めて今までのお礼を言った。

アーライ様は優しい笑顔で、「幸運をお祈り致します」と言ってくれた。

この状況で幸運なんて望めるのか・・・と思うが、優しい笑顔を見ていると頑張ろうと思えた。

## 04 旅は道連れ??

なんで、私がこんな目にあわなければいけないー！！！

大声で叫びたいのを堪えなければいけないのも腹が立つ！

私、カイル、アズール、イグナールの4人での旅はとにかく目立つた。

何でかという、3人が美形だったからだ。しかも種類の違う美形だ。

カイルは寡黙でちょっと冷たい感じ。アズールは子供っぽい（本人に一度言ったら睨まれた。怖かった・・・）、イグナールは人好きのする笑顔を浮かべ、優しい感じだ。

もちろんカイルが將軍閣下であることも一因だと思うが、隠密であるということであまり気にはされない・・・らしい（カイル談）私としてはどこか!?!とりたいところだが、本人はそう思っていない。

そんなこんなで行く先々の女性の視線が怖いこと、怖いこと。何でアンタが!?!って睨みつけられる。

見目麗しい、ナイスボディなお姉さん達が近づいて来た時なんかは、特に怖かった。

どんつと体を押され、足を踏まれ、腕なんかはつねられた。

ひいひいと思つて、さり気なく彼らから距離をとろうとすると、どこに行く?とばかりに腕を引かれて、さらに怖い視線を受けてしまふ。

怖いよと半泣きになりながら、私は石ころ、私は石ころとぶつぶつ言つて、アズールに不審がられた。

イグナールは分かつてゐるみたいだけど、何のフォローもない。タイヘンだねって笑顔。

こいつ絶対性格悪い！！！！と思っってしまった私を誰も責めまい・・・。

やっと宿に着いたときにはぐったりしてしまふ。

あ！宿は一人部屋ですよー。一応とはいえ、唯一の女性ですから。最初のうち、カイルなんかは護衛のためにもとか言っただけで相部屋にしようとしたけど、女性ですから！！と強く拒否し、今は悠々と一人部屋を満喫できる。

しかし、ずっと部屋にいても何もすることは無い。それこそ寝るだけだ。

もちろん疲れているから寝るのはいいんだけど、ずっとなんて無理すぎる。

特に彼らが情報収集とか、挨拶とかで数日滞在しなければいけない時なんかは。

最初は我慢しましたよ？お連れするなんて言ってるけど、連行だも

ん。

だけど、そのうちなんで私が我慢しなければいけないの！？と思

少しでもいいから気分転換に外出したいと訴えた。

最初は断固として聞き入れてもらえなかったけど、何度も言っているうちにイグナールが少しならいいんでは？と言ってくれ、1人にならなければとの許可の下お許しが出た。

ただ、やったー！！！！と思っただけです。最初のうちだけで、街のお姉さん方の視線だつて3人の誰がついても美形さんなんて、街のお姉さん方の視線が怖いんだよ～～。

## 05 旅は道連れ??

最初は我慢しましたよ！だってせっかくの外出だからね！  
3人と歩いているときよりましでしょ！って思いながらね。

でも楽なのはイグナールといる時だけだ。まあ、イグナールの本性は根性悪だって知ってますし？

彼も私が気付いていることが分かったみたいだけど、表の顔での対応をしてくれるので非常にありがたい。

カイルも寡黙で重苦しい雰囲気だけど、気遣ってくれているのが分かるから気にしないようにしてる。

面倒なのはアズールだ。

なんでこんな女の護衛をしなければいけない！！雰囲気を全開にして、常に不機嫌オーラ。

少しでもお店を覗くために止まるものなら、ノロマ！っていうオーラバリバリで睨む。

・・・全然楽しくない。

だけど毎回イグナールってわけにも行かないから、仕方がないと思っただけだけど、ある時それは起こった。

すごくきれいなガラス細工があった。

光を取り込んで、反射するのがとても綺麗で、ああ、昔はよくガラス細工を集めてたんだっけとふっともう帰れない日常を思い返していた。

お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん……。元気かなあ  
と泣きそうになった時、

「いつまでもぼさつとしてんじゃねーよ」

とそれは言った。

今日の護衛はアズールで、彼は朝からイライラしていた。  
今日はここ数日滞在している街の領主様の城にカイルとイグナールが赴いていた。

なんでも將軍閣下に領主様の城に滞在されてはどうかとのご招待があつたらしいのだが、私という存在があつたためか招待を断り、いつもどおり宿に泊まつていた。

しかし領主様は挨拶だけでもと宿へ来ようとしたらしいのだが、カイルが騒動になつては困ると言い、妥協案として、カイルとイグナールが護衛として領主様の城へ向かつた。

アズールはカイルと領主様の城へ行きたがつたのだが、カイルより私の護衛を命じられ、居残りさせられた。それが不服たつたんだろう。そんな中で、私が外出したいと言つたのが余計に腹立たしかつたに違いない。それが分かつていたから、彼の言動を気にしないようにしていたんだけど……。

「だからだらしてんじゃねーよ。なんで俺がお前の護衛なんかしなきゃいけないんだ。

たかが一般人のお前を。いつもいつもカイル様を困らせて楽しいか？

全く、親はどんな教育をしてんだよ。無教養なのは分かるが、その身分にあつた行動ぐらいして欲しいもんだぜ」

……何を言われたのか、一瞬分からなかつた。

何で護衛？カイルを困らせる？なんで親のことを馬鹿にされなければいけない？

身分つてなんだ？私が好きで連れ回してらつて？

……いろいろな事がぐるぐる回つた。

「……い」

「ああ、なんだよ」

「……さっ」

「まとも話すことも出来ねーのか。ホントどうしようも……」

「うるっさーい！！！！」

やばいとは思ったけど、我慢できなかった。

封印の鍵がひとつはじけるのが分かったがどうしようも出来なかった。

私を中心にして風が舞い上がる中、驚いているアズールの顔が見えたが、それすらむかついた。

周囲の人のことも考えられなかった。

「なんで、あんたにそんなことを言われなければならない！？

いつもいつもあんたたちの都合で振り回されなきゃいけない！？

いい加減にしろ！って言いたいのは私のほうだ！！！！」

アズールに向かって、風が刃となって向かおうとした。

……瞬間、アリア様から頂いたレイルのペンダントが目に入り、光った。

気がそれたと同時に、無理やり術を押さえ込み、風を霧散させ、呆然としているアズールや周囲の人を一瞥した後、そのまま踵を返した。

## 06 旅は道連れ?? (前書き)

全然進みません・・・。

早く主要人物をもっと出したいのにい・・・!

## 06 旅は道連れ??

人だかりを抜け、人気の少ない裏通りで座り込む。

まずかったと思いつながら、アリア様に感謝する。

きっとレイルのペンダントがなければ、アズールを風の刃で切り刻んでたと思う。

関係ない人も巻き込んで傷つけていた。

こんなことがないように、封印してもらったのに……。

どれくらいそうしていたか分からない。

ただ、気付いたときには取り囲まれていて、頭を殴られ意識を失った。

ぴちゅん、ぴちゅんと水の垂れる音がする。

頭痛を感じながら、体を起こそうとして、縛られていることに気がつく。

どこだ、ここ……?

意識を失う前を思い出そうとして、殴られ気絶したことを思い出す。頭は大丈夫かな?と思うが、いかんせん手が使えないので確認できない。

困った……と思いつながら、とりあえず手を自由にしようと、封印が解けてしまった風の魔術を行使しようとして使えないことに気付く。

「やっと目覚めたか」

ふいに声が聞こえてきて、ぎよつとする。

暗闇の中で見えないことに少なからず恐怖を覚えるが、徐々に暗闇に慣れた目が映し出したのは一人の男だった。・・・気配がなかった。

「なかなか目覚めないから、心配したぜ。やつらはお前さんを放り込んだまま、どっかに行っちまったからな」

「やつら・・・？あなたはいつたい・・・？」

「ああ、俺はゼス。お前さんと同じようにあいつらにとっつかまっ

た。  
あいつらっていうのはお前さんを襲ったやつと同じだよ。俺たちはこれから競売に掛けられる。まあ、人身売買だな」

「・・・あー。人身売買ですかー。あ、私はレイと言います」

と挨拶すると、きよとんとした顔をした後、ぶつと噴出した。  
何がおかしいんだろっ・・・？

「この状況で、それか！すけー度胸据わってんのな！」

「別にまだ状況を把握できてないからですよ。ここは魔術を使えないんですかね？」

えーっど・・・」

そう問うと、やっぱり変わっていると笑われた。

「ゼスでいい。あと敬語もいらねえぜ。」

ああ。使えない。手枷がついてるだろ？それが封魔具になって魔力を封じてる。まあ、術が行使できる奴は少ないからな。自由にさせといたら危険だろ？でもたからこそ手に入れたっていう輩が多いんだよ。需要はあっても高嶺の花。希少価値の高い、んな商品を扱ってるのさ、ここのやつらは」

「じゃあ、ゼスさん・・・ゼスは魔術士？それとも別に希少価値がある？」

「そこまで立派なもんじゃねーけど、そこそこ希少かね。」

お前さんもだろ？レイ。まー、ここに入ってるってことで既に分かるけど。魔術対応なんだよ、ここ」

「そうかー。困ったなー。面倒くさいなあ」

「くくつ。全然困ったようには聞こえねえなあ。てか、怖くないのか？

どんな扱い受けるか分かったもんじゃねーぞ？」

「ゼスもそうじゃない。」

別に怖くないわけじゃないよ。ただ前に同じ様な目にあったことがあって、少し耐性があるのかな？」

「そんな耐性いらなくねえ・・・？暴れる、泣き出すされないのは、こっちとしてはありがたいけどな」

苦笑するゼスを見ながら、あのときのことを思い出していた。・・・あのときの事は思い出したくないのに。

ただ、ただ辛く、そして怖かった。ずっと泣いてて、何度もつるさいつて暴力を振るわれた。

助けに来てくれるって期待してた。助けをずっと待っていた。でも・・・だれも来なかった。助けを諦め、もうどうなってもいいと、死にたいと思った。

逃げたのは奇跡といっても良い。ただあの場所に連れ戻されるかもしれないと思うと逃げたことすら恐怖だった。日々が苦痛だった。

「でもよ、どうするんだ？助けでもくるのか？」

「助けなんてないよ。ただ隙を見つけるしかないな。あとは運」

「あっさり言うな。それが難しいんじゃないか」

呆れたようにいうゼスにもっともだという視線を向け頷くと、ますます呆れられた。

## 07 旅は道連れ?? (前書き)

カイル視点となります。

時間としては06話の時・・・です。

## 07 旅は道連れ??

本当に貴族というものは面倒くさい。と溜息がこぼれる。

隣には苦笑しているイグナールがいて、同感とばかりに頷いていた。

領主からの招待が来たのは、街について直ぐだった。

『お招きする準備は整っておりますので、是非城においでください』と拒否されるとは思っていない招待に呆れたが、隠密の為、招待は遠慮したいと伝え、使者にはお引取り願った。

しかし1時間も経たないうちに再度使者が訪れ、『では宿に領主自ら挨拶に伺いたい』との要望を伝えられた。使者を前にしてため息をつくことは出来ない。ぐっと堪えて、あまり人目には触れたくないため、こちらから城に伺う。ただ宿は城下に取ることは強調し、それでも良ければと返答すると、『明日にでも是非!!』との回答が来てしまった。

翌朝、レイ様にその旨を伝え、自分とイグナールで領主を訪問すること、護衛にアズールを残していくことを告げた。レイ様はアズールが護衛というところで、ちょっと困った顔をされたが、否やはなかった。

「では、行って参ります。なるべく早く戻るように致しますが、御身をお気をつけください」

そう、レイ様に伝えると、

「お気になさらないでください。どうぞお気をつけて」

と手を振ってくれた。ふつと今よりも幼いレイ様を思い出した。そういえば、あのころは怯えられていたが、出かける時にはそうやって見送ってくれていたな……。

「ありがとうございます。」

アズール、レイ様をしつかり護衛するように」

不承不承に頷くアズールに不安はあったが、部下として信頼していることを伝えるため、彼の肩を叩き、「頼む」と告げた。

アズールは城への護衛を強く希望していた。しかし貴族の対応に慣れているイグナールの方が物事が進みやすいと思った為、アズールを残すことを決めた。感情的になりやすい面があったが、それでも部下として信頼していた為、彼を護衛として残す。

領主からは過剰なほどの歓待を受けた。將軍を拜命している自分を招待できたことがよほど嬉しいらしい。そのうち領主の娘2人を紹介された時には隠密だと言っただろうと呆れてしまった。なんでもんなことに……と苦々しい思いでいっぱいだ。

「カイル様、うちの娘達はこの辺りでは春の女神とも謳われているのですよ！」

それはもう、王都のお嬢様方々にも引けをとりません!!」

領主は上機嫌に話し、上の娘（だろっ）は媚を含んだ視線をこちらに投げかけてくる。

イグナールにはもう一人の娘が近寄っているのが見えるが、失礼がない程度の無関心な笑顔であしらっていて、苦笑する。

どこかで切り上げて戻らねば。そう思ったときだった。退出しようとイグナールに視線を向けたその時に……。

城下から一気に膨れ上がる魔力を感じ、慌てて席を立ち窓に近寄った。

イグナールも同じように窓から城下を見る。

「感じたか？」

「はい。これは風の魔術ですね。近くにアズールの魔力を感じます。これは……」

そう。感じた魔力の近くにアズールがいたのだ。これはどういふことだ。まさか、レイ様になにか……。

嫌な予感が胸を覆った。

08 旅は道連れ?? (前書き)

カイル視点?となります。

## 08 旅は道連れ??

引き止めようとした領主一家を振り切り、魔力を感じた場所へイグナルと共に急ぐ。

その途中でこちらに血相抱えて走ってくるアズールの姿を認める。

「アズール！何があった！レイ様はどうした!?!」

「あつ！カ、カイル様！！申し訳ございません。見失ってしまいました！！！！！」

事情を聞こうにも慌てまくっているアズールの話では、どうしてもなのか要領を得ない。

「イグナル！アズールを連れて宿に戻れ。落ち着かせたら、事情を聞け！」

私はレイ様を探す！！！！」

「カイル様、お待ちください！！闇雲に探しても時間を浪費するだけです。まずは状況を把握するためにもカイル様も宿にお戻りください！冷静さを欠いた貴方様ではレイ様をお探することは難しいかと存じます！！」

焦燥に駆られるが、イグナルの言にも一理あると思い、逸る気持ちを抑えて、宿に戻った。

宿に戻り、アズールを落ち着かせると、彼はぼつりぼつりと話し始

めた。

「カイル様達が外出された後で、あいつ・・・レイ様が外出したいと言われました。駄目だと言ったのですが、1時間だけでも良いからと言われ、渋々外出しました。色々軒先を見ていたレイ様を見ている内に、段々と何の用事もないのに外出したいと言われたことと・・・カイル様のお供が出来なかったことで苛々してしまい、つい、レイ様に当たってしまいました。」

そうしたらレイ様から『うるさい』と。『なんであんた達の都合に振り回されなきゃいけない。いい加減にしろ』と怒鳴られた瞬間、風が舞い上がり、刃となって、俺に向かってきました・・・。

駄目だと思った瞬間には風の刃は霧散し、事なきことを得たのですが、状況を把握できなくて呆然としているうちにレイ様のお姿が見えなくなり、探しておりました・・・。」

アズールからは後悔が見て取れるが、今は彼よりもレイ様を見つけて出すことが先決だった。

「処分は追って言い渡す。まずはレイ様の御身の無事を確保する。アズールは残れ。イグナールは街の警備団にレイ様搜索の要請を」

「お、俺も探しに行きます。元はといえば俺が原因ですから!!!」

「お前が見つけたとしても、レイ様が素直に従ってくださるか分からん」

ぐつと押し黙ったアズールを一瞥し、イグナールに視線を向けると、

「では、警備団への要請をアズールにして、カイル様と私はそれぞれ搜索にあたりませんか？」

そうすれば、それだけ広範囲で探せます」

とイグナールが妥協策を提示し、アズールは継る視線を向けてくる。考え込んでいる暇はない為、それで良いと告げ、外に出ようとしたところで、イグナールから声が掛かる。

「カイル様。レイ様はいつたいた方なのですか？極秘任務と聞いていましたから、今までかの方の素性をお尋ねすることは差し控えておりましたが、こういつたことになってくるとお聞きしたほうが搜索が円滑に進むと考えております。かの方は魔術士なのですか・・・？」

「レイ様の素性は近いうちにお前達の知るところとなるだろう。だが、今はそのような詮索は無用だ。」

また、俺はあの方が魔術を使用したことは見たことは無い」

「では、風の魔術を行使したのはレイ様ではないと・・・。そうお考えですか？しかしアズールの話を聞くと行使したのはレイ様で間違えないかと・・・」

「レイ様が魔術を使用できないとは言っていない。ただ俺は見たことがないと言っただけだ。行使できる可能性は高い。アズールの話どおりならば、行使できると考えて間違いないだろう」

「・・・かしこまりました。では、それも考慮して搜索致します。ただ警備団にはその情報は伝えたほうがよろしいでしょうか？」

「いや・・・。魔術を行使できるかもしれないことは伝えるな。レイ様に注目が集まるのは良いことでない。単なる人探しと情報収集でいい」

「分かりました。・・・アズール、分かったな」

頷くアズールを見て、イグナールとも視線を合わせる。軽く頷いてからそれぞれ行動に移した。

## 09 旅は道連れ??

ゼスは3日ぐらい前に捕まったのだそうだ。

なんでも酒場で、酔っ払ってしまい、火の魔術を使ったらしく、それで目をつけられたらしい。

説明している当事者がなんで『らしい、らしい』なのかと言つと、

「いやー、かなり酔っ払ってたらしくてなー。目が覚めたらここだったんだよ。」

で、どこだーつつつてちょっと暴れたら、ここに来た奴が教えてくれたんだよー」

「・・・タイヘンデシタネー」

「そんなことないぜー。知らないうちだったからなー」

ガハハと笑っているゼスよ。それでいいのか!?と突っ込みたくなつたが、面倒くさいのでやめた。

「俺はそーゆー感じでとっつかまつたんだけど、お前は?」

「あー、まー、私も同じ感じですよ。私は風の魔術を使っちゃって疲れて休んでたところを殴られまして・・・」

そういつたところで殴られた箇所は大丈夫かなあと暢気に考えてしまった。

まあ、商品に傷をつけることはないから、そんなに心配しなくていいかなとか余計なことを考えていると、

「そうなのかー。でもお前この街のやつじゃないだろ？一人まで来たのか？」

「いえ、私も含めて4人ですよ」

「じゃあ、心配してんじゃねーの。あ！そいつらが助けに来てくれるって信じてるから、暢気なのか？」

「心配・・・してるでしょーね。でも助けは期待しないでですよ」

そう、心配はしていると思う。だって王都まで連れて行かなきゃいけないのに見失ってしまったから。

私の心配というよりは命令を果たせないかもしれないことを心配しているだろう。

でも助けは期待しない。するべきではない。彼らを信頼している訳ではないのだから。

なのにここまでの道のりで我俣を言っただけで外出までさせてもらっていいなんて。なんて馬鹿なんだろう。

今更になって認識なくていけない自分に呆れてしまう。

きいと扉が開き、男が2人入って来た。

1人は小太りな中年オヤジ。ニタニタと気色悪い笑みを浮かべながら、こちらに歩み寄ってくる。

もう1人は中年オヤジの少し後ろについている。30代ぐらいだろうが、無骨なオジさんって感じの人。

間にまぎれてしまうような静謐な雰囲気があり、怖い。

ああ！ガマガエル！！！！と何に似ているか分かった中年親父が、

「お目覚めかな。お嬢ちゃん。その男に話を聞いたかもしれないが、君が住みやすい場所を提供させて

頂こうと思つてこちらにお連れしたんだよ」

とのたまつた。はあ~~~~！？お連れした？貴方の辞書では殴つて連れてくることをそういうんですね！と呆れてしまう。

「ゼスに聞いたことと対極にあるようなお話ですね。せつかく私にとって住みやすい場所とやらを提供して頂く為にこちらに連れてきて頂いて恐縮ですが、私は辞退させて頂きたいのですが？ああ！何の御礼も無く辞退させて頂くのも申し訳ありませんよね。だったら、貴方が住みやすい場所を私がご提供させて頂ければ嬉しいですね。貴方でも過ごしやすいと思いますよ、牢獄。滅多に経験できる場所ではないでしょうから。それとも沼地なんかにご招待したほうがいいですかね？貴方に見合った美人がゲロゲロ鳴いていると思いますよ」

慇懃無礼にガマガエルに言つてやると、ゼスがぷつと吹き出した。おいこら、アンタも私と同じ立場だろうが。何後ろ向いて笑いを噛み殺してる！！そう言いたいのが、目の前のガマガエルが沸騰しそうなくらい顔を赤くし、持っていたステッキを檻の隙間から私のお腹目掛けて突き出した。ぐつとお腹にもろに入つてしまい、胃液を逆流しそうなる。

「そんな口を叩けるのも今のうちだぞ！お前は明日の晩、競争に出してやる！！！」

いいか！少しでも長生きしたければ、これから買っていくご主人様にはその無駄口は閉じておくことだな！ そうしないといくら魔術が使えるからといって命はいくつあつても足りんだろうからな！

「!

とドスドスと音を立てながら、去っていった。

「おいおい、大丈夫かあ？いくら商品だからといって手を出されな  
いわけじゃないことなんて承知しているだろう？ 目立ったところ  
じゃなきゃ、弱らない程度であれば、どんなことでもされるぞ」

ゼスがのんびりと忠告した。おっせーよ！！と思うが、その忠告を  
聞いてても言っただろうなと思う。

確かに粘着質っぽくてしっこそうだが、小物っぽいオーラバリバリ  
だ。あんなガマガエルどうってことない。

## 10 旅は道連れ??

次の日、夜が更けてきた頃から外で人が歩き回る音がし始めた。そろそろ始まるのかな……。さてどうしよう。

男が3人入って来て、私とゼスの鎖をもち、牢屋の外へと連れ出した。

にやにやしながら、

「お客様がお待ちだぜ。まあ、お前達の出番は最後のほうだから緊張しすぎるなよな。

まいつちまうぜ〜〜」

私はちらつと冷たい視線をその男に向ける。ゼスはというと・・・あくびをして聞いてない。

むっとしたみたいだが、商品の私達に手出しは出来ないのだろう。

チツと舌打ちをした後、乱暴に鎖をひっぱった程度に留まった。

私がいるところからは会場内は見えない。だけど、状況が分からなければ動きようが無い為、風の瞳を使って会場内を見ている。

私は確かに魔術が使えないように鎖につながれている。けど・・・私には鎖が封ずる魔力はない。

ただ魔力がなくても、魔術が使えるのだ。・・・正確には魔術ではないけど。

会場には多くの男性、女性がいた。高級そうな衣服や豪華なドレスを身にまとっているからさぞご身分が

高い方々なのだろう。顔が分からないように仮面をつけている。ただ家畜をみる目で人を買っているのには気分が悪かった。

おっと、そんな場合じゃないなーと思い、周辺を探る。

会場には鳶のような植物が壁を張っている。近くには水が流れるような気配がある。が、あまりにも心細い気配だから、使うのは無理だろう。

風の封印は解けてしまったから出来れば風のみで逃げたいが可能かなあ……。土は念のために解くか等逃げる算段を模索する。

私には秘密が多くある。魔力が無くとも魔術が使えることもそのひとつだ。

ただそれは街中で暮らすには過ぎたるものだ。一般の人は魔術など使えないからだ。

私に封印を施してくれたのは師匠だった。短い間だったけど、色々なことを教えてくれた師匠を私は尊敬していたし、魔術師を生業としていた師匠は世間でも知られる程の力を有していた。その師匠が封印を施すべきかどうかを悩むほどの力だった。

師匠は力のあり方を教え、私は一生懸命修行した。だけど心がその力を拒否をしているからか、なかなか制御できず何度も師匠に助けもらった。封印をお願いしたのは私だ。

「封印してください。私には過ぎた力です。誰かをまた傷つけるかもしれない。それが怖い……。」

もちろん制御できるように修行は続けます。だけど今の私では、今の私の心では無理です」

「人を傷つける力は人を守る力と紙一重です。それは力を使う人の心次第です。貴方はそれを分かっています。だから貴方の言う通り

にしましょう。だけどこれだけは覚えていてください。私は貴方が可愛い。貴方を愛しています。だから幸せになる努力を惜しまないでくださいね。

私が封印できるのはきっかけとなる入り口のみです。だからいつか解けてしまうでしょう」「

にっこり笑った師匠の言葉に涙ぐみながらうなずいた。そして封印をもらった。

## 11 旅は道連れ？

封印は私の深層意識にある。

私は毎晩修行と封印が解けていないかを確認する為に、深層意識にもぐっていたからすんなり行える。

いつもと同じようにゆっくりと降りていく。

どこまでもどこまでも降りて行くように思われるが、下に光る場所を見つけた。

ゆっくりと足をつけ、姿勢をただすと私を囲むように扉が現れた。

それぞれ色が異なる扉が6つ。

そのうち緑の扉の南京錠が壊れていた。ぐるりと扉を見回し、茶色の扉を見つける。

茶色の扉のみ鍵が南京錠が掛かっていたが、それを手に取り、瞑想の為に目を閉じた。

目を開くと、南京錠を持っていない方の手に茶色の鍵が出現していた。

鍵を開場すると南京錠は砂状にとけて消えてしまった。ただ扉を開けることはせず、そのまま深層意識より浮かび上がった。

意識を戻すとそろそろ競りも終盤のようだった。

「さあ！ほとんどのの方が本日の目玉になります魔術師をお買い求めにいらっしやっと思えます。

大変長らくお待たせいたしました。本日は男1名、女1名の計2名をご用意しております。男は火を、女は風を扱うことが出来ます。お客様を満足させること確実です。さあ！それではご覧にいれましょう！！！！！！！！！！」

ガマガエルが意気揚々と紹介すると、私とゼスの周りにいた男達が鎖を引っ張り、私達を壇上に連れ出した。

「本当に魔術が使えるのかしら？」

「どのくらい持つものかねえ」

「あんな貧相な娘を連れて歩くのは嫌だなあ。男の方が使い道が多いだろ。それなら男を買おうか」

「小娘だったら私でも扱いやすいんじゃないかしら。所詮魔術なんて面白ければいいのよ」

色々な声が聞こえてくるが、そんなことは私の知ったことじゃない。それよりもいかに自然に薦を動かすか……。どんどん競りの値段が上がるにつれ、場内は熱気と興奮に飲まれていった。

私はそんな場内とは反対に気分はどんどん下降していった。ここにいる人達の人を人とも扱わない様子に過去を刺激される。感情のままに動いて後で後悔するのは自分だと分かっているが、この人達はどうなるかと関係ない。

「……もー、やっちゃおうかなあ。いいかなあ。いいよなあー  
ー」。

『攻撃は最大の防御』っていうしな〜〜〜。

とかつらつら考えながら、周囲を観察し、タイミングを測る。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7942v/>

---

大切なものは

2011年11月8日19時06分発行